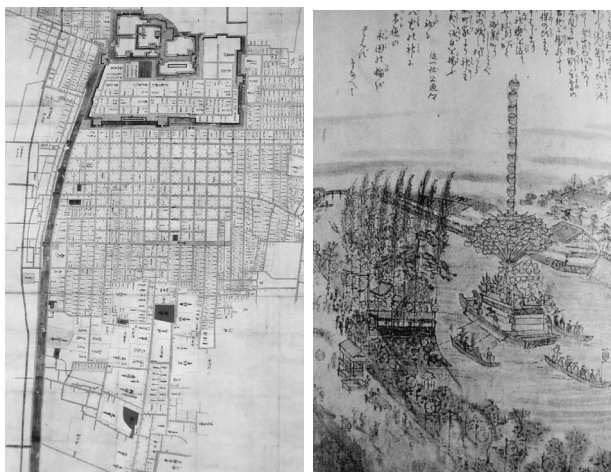


名古屋市堀川の埋もれた水文化の復興と 継承活動による地域づくり

特定非営利活動法人 堀川まちネット

名古屋堀川の埋もれた水文化

名古屋市の堀川は慶長15年（1610）に名古屋城域への物資輸送手段の一つとして福島正則らの大名が先頭になって開削されました。尾張七代藩主徳川宗春が享保16年（1731）「温知政要」を掲げ、所謂「まつりとまちづくり」を行って経済活動を活発化させました。また宗春は、堀川の洲崎にて提灯を付けた「まきわら船」を浮かべ、町衆とともに川の浄化や無病息災を願う祭り行事を始めるなど、町衆の水文化の始まりとなりました。



江戸時代の堀川図 1) と洲崎の祭り図 2)

その後「冥加さらえ」等の清掃も町をあげて行われ堀川を清掃浄化する行事として定着し、江戸時代末期まで行われました。堀川のまつりが明治時代に5隻の「大まきわら船」を浮かべ河川浄化の願いをこめた祭りへと変化しました。堀川の水文化は、戦時中には中断したが祭りの名称を変更し戦後に復興した。昭和48年（1973）まで行われたが、その年を最後に堀川から「大まきわら船」が種々の事由により消えて陸に上がりました。昭和初期から堀川は、近代化とともに汚れが目立つようになり、その後水文化も無くなり市民に忘れ去られ所謂ドブ川と化してしまいました。

堀川まつりの再興と地域問題

名古屋市熱田区に集う若者は「あつたっ子」を昭和60年（1985）9月に創刊、発行を続けるうち古の名古屋の堀川を知り、賑わいのある活気にあふれた水文化を創造し継承していたことを発見しました。平成2年（1990）「堀川まつり実行委員会」を立ち上げ、堀川浄化を願う水文化「堀川まつり」の再興を始めました。最初は冷ややかな地域の人々も徐々に協賛し小まきわら、中まきわら船を製作し、まつりの再興活動をしました。



堀川を西区円頓寺へ北上する中まきわら船

そこで回数を重ねるごとに気がついたことは、地域の若者がほとんど参加していないという問題に直面しました。まちづくりとともに水文化を継承する若者の育成を図る活動をも始めるため、昔行われた「冥加さらえ」という水文化を模した堀川の清掃活動を行う必要性を感じました。これなら若者や住民の理解も得られ易いとの感触から清掃活動を始めました。次いで市民協議会「クリーン堀川」や自治体も一緒に行へる活動へと企画しました。そして水環境保全、水文化継承および河川地域の賑わい復活と活気に溢れたまちづくりを「堀川まつり」とともに目指しました。



子供とともに町を練り歩く中まきわら

①プロローグ

「堀川まつり」への理解が広まり要望も増えたことから、平成17年（2005年）3月に「あつたっ子」と「堀川まつり実行委員会」を合併し「特定非営利活動法人堀川まちネット」として活動することになりました。ここで大まきわらに至る1年前の顛末を紹介します。

ある日、K氏は思いがけない人にめぐり合った。K氏の小学校の同級生であるS氏であった。何十年ぶりである。S「おみゃー、いまなにやっとなんだ？」 K「建築事務所と堀川まつりなんだわ。」 S「なんで堀川まつりなんだー？ そーそー 昔よー、七里の渡しから大瀬子橋や内田橋、白鳥橋でよー、20万人くらいむらがって熱田の大まきわら観たんだけどよ、あれってよー、もうつくるきないきゃー？ うちの、おやじもよー、よく話すんだわー。」 「大まきわら できるんだったら なんでも手伝うでよー。」 「そしたら、大まきわら船の上で思いっきりビール飲みたいんだわー。」 「ほんと、なんでもやったるわー。」 ここでK氏は、おぼろげながらある人の言葉を思い出した。「ことしも、大まきわら できないかねー」会の顧問であったKT氏の毎年言っていた言葉です。K「そうかー、大まきわらかー S君が本気で手伝ってくれるなら もしかして、それにKTさんも毎年言っていたし。」 こうした様々な要望もあり当初から念願の「大まきわら」を製作「大まきわら船」を「堀川まつり」に再興し堀川のシンボルでまちづくりの起爆剤にしたいと考えました。

②企画制作

「大まきわら」は直径6m、高さ14mにも達する大きなもので、中心から365本の竹が出て先端に提灯を吊り下げた半円のお椀を伏せたような形をしており、後ろには14mの高さの「天月」という竹を揚げ、提灯を12個取り付けています。手分けして作るために設計図に明るいE氏が基本設計図と製作図を作りあげました。この結果、構造を支える力木の製作や竹の寸法取りが誰にでも、いつ参加しても着実にでき、少ない時間を有効に活用できるようになりました。製作場所もS氏が提供してくれました。次に使用する竹の採取可能な場所を各地に探しました。しかし適当な太さ、長さの竹を大量に入手するには距離が遠かったりして容易に入手できず、一時はプラスチック、ガラスファイバーのパイプ等の使用も検討しました。これでは費用が掛かりすぎ困難な状況となったが、堀川本流庄内川で、私たちも参加している「土岐川・庄内川流域ネットワーク」から耳よりな話がありました。ネットワークが活動している守山区内、庄内川河川敷の志段味ピオトープに大量に竹が自生していることを聞きました。



冬の竹切り出し作業

ネットワークと国土交通省庄内川河川事務所の許可を得て、2本の竹を採取し検討。この竹を大まきわらに使用することに決めました。2月の日曜日に約10名の会員とともに約4～5mの竹を2回にわたって切り出しました。500本近くの竹を「クリーン堀川」会員の好意で一時保管と乾燥が行えました。ここで「大まきわら船」の問題点を述べますと、堀川から名古屋港を廻るには大まきわら頂部の高さ14mの提灯棹の天月が各橋を安全にくぐり抜ける必要がありました。事前に天月を傾斜可動式と

し通過する各橋水面からの高さ、当日の潮位を調査、各橋を安全にくぐり抜けることに配慮した設計としました。



大まきわらの製作作業

提灯は蝋燭ではなく豆電球とし、発電機から100Vを小さい配電盤にて低電圧化し377個の豆電球への給電を会員が考案しました。

提灯は風が吹いても回転せず、飛んでいかないように経験から工夫しました。大まきわらを載せる台船（約100t）は地元の港湾土木会社が提供し運行してくれることになりました。他に10隻程大中小の船が必要でしたが地元船所有者が参加してくれました。さらに専門学校生が大まきわらの組み立て、まつり運営を手伝うことになりました。

③堀川まつり

折しも、平成17年（2005）は「愛・地球博」の開催年で4月に愛知県の山車100台が勢揃いし盛り上がり、各所で万博イベントが行われていました。この時期に大まきわら船が再興するなら最高でした。資金面で大まきわら製作、育成講座、まつり運営



32年ぶりに堀川に浮かぶ大まきわら船

を行うには協賛金や寄付を例年の約2倍必要としていました。6月初め（社）河川環境管理財団から朗報が舞い込み、心置きなく行える状況となりました。7月17日は大まきわらのお披露目となりマスコミ取材の中、専門学校生が約60名参加し厄介な組み立てを中心に作業してくれました。

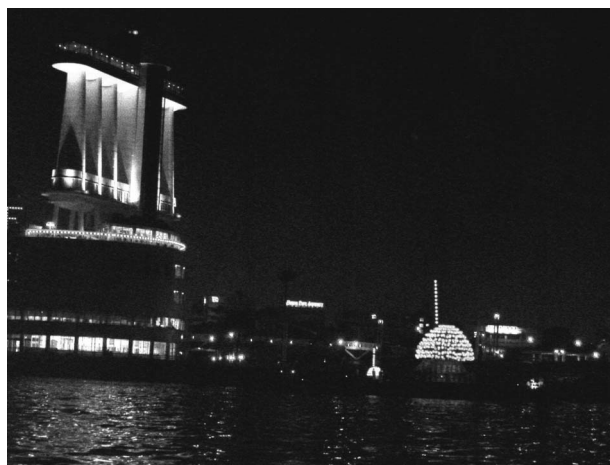
ここでトラブル発生、大まきわら提灯が一部点灯しなかったが、配線を変えて本番までに修正が可能とわかりホッと一息。



堀川を照らす大中小のまきわら船

7月23日は御葦刈り（ミヨシカリ）と洲崎神社安全祈願祭、祭りの無事を祈りました。

7月30日堀川まつり当日は、堀川全流域をまきわら船で廻るため、中小まきわら船10隻ほどで西区円頓寺七夕まつりと交流、続いて北区黒川まで堀川を遡りました。大まきわらの組み立ては別の桟橋で会員、学生を含めて数十名で朝から行われ6時間かけてやっとでき七里の渡しに曳航されました。夕暮れ堀川下流七里の渡しに大、中、小まきわら船を揃え御葦流し、献灯会をしました。そして名古屋港へは50年ぶりに「大まきわら船」を若者とともに曳航、「堀川まつり」を再興しました。



50年ぶりに名古屋港に浮かぶ大まきわら船

「大まきわら船」の堀川曳航により名古屋港や堀川沿いの人々に感動を与え、新旧文化の対比した新しい夏の風景と水文化の魅力を創り出したものと考えています。

堀川の水文化とまちづくり

名古屋市熱田区界隈は高齢化が進んでおり名古屋市内で表 - 1に示すように人口の最も少ない区と化し、もはや地域住民だけでは地域の活性化が思うに任せない地域です。堀川水文化の象徴とも言える「大まきわら船」を再興して、まつりに若い人を呼び寄せ「まつりとまちづくり」および堀川を清掃浄化し行政、市民、学校と連携することで地域にインパクトを与え高齢化した意識を改革し参加してもらうことを働きかけました。

表1 名古屋市区別人口と
高年齢者、若年齢割合（2000年10月1日）^{3）}

区 別	人 口 (人)	65歳以上 (%)	15歳未満 (%)
熱田	62,625	19.0	12.3
中	64,669	17.0	9.0
東	65,791	17.5	11.8
瑞穂	104,410	18.7	12.3
昭和	105,289	17.4	11.5
中村	134,955	20.4	10.7
西	140,364	16.7	13.1
南	147,912	17.8	13.0
千種	148,537	17.0	11.8
港	151,614	14.0	15.8
名東	153,103	11.5	16.4
天白	153,342	11.4	16.1
守山	154,460	14.1	15.1
北	167,640	17.2	13.7
緑	206,864	12.1	17.1
中川	209,982	15.1	15.3

堀川まつりでは祭りに必要な太鼓演奏の若い参加者を募り地域と各所から小、中学生や高校生が参加、15年以上にわたって続いています。20～30歳代からなる「大治太鼓保存会」や小学生を含めた「堀川太鼓を普及する会」等のチームが参加し続けています。「熱田区まちづくり協議会」「名古屋手をつなぐ育成会」等のバザーなどでの参加も大い



堀川まつりに参加した太鼓連

に盛り上げ勇気を与えてくれました。平成18年には「水掛まつり」を新たに行い好評で若者の参加を容易にしました。こうした名古屋の堀川を中心とした水文化の一端を再興し継承者問題を「まつりとまちづくり」活動により後継者育成を図りました。



小学生も参加した堀川一斉清掃

堀川清掃活動では行政、学校とともに青少年に対して河川の環境教育、保全活動の大切さを訴え、河川文化や街の発展を図りました。



船上からの堀川ゴミ清掃

しかし地域の人にはなかなか理解してもらうことが難しく、容易に誰にでもできる堀川清掃活動を行い広めて行くことで徐々に理解されるようになりました。特に堀川清掃に小、中学校が参加して

いただくことで理解が広まりました。古の「冥加さらえ」という堀川の水文化を知らない若者にも川をきれいにするという文化は無意識のうちに脈々と流れていました。初期に参加した小、中学生は大人になった現在も清掃活動に参加し、最近では専門学校も授業の一環として各種行事に参加しています。一度、水文化が消えてしまうと再興までに15年以上工夫し活動しないと地域の人には理解されません。これから町全体の活動が当地の水文化継承と相まって、まちづくりが本格化すると確信しています。以上の活動を通じて地域のまちづくりとまつりや堀川清掃とを両立させた「まつりとまちづくり」は、堀川とその水文化を大切にすることを地域に訴え理解を得たと考えています。

将来展望

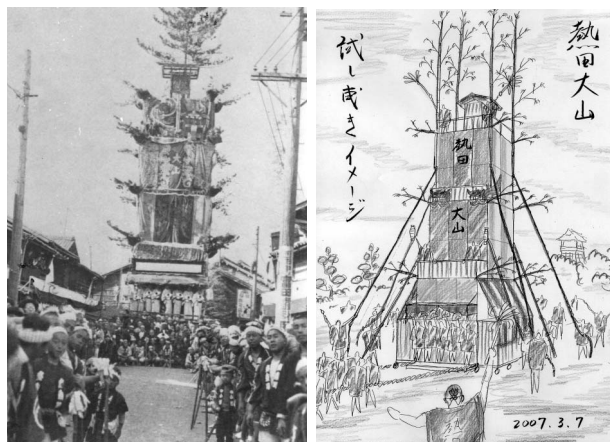
東海道五十三次の四十一番目で江戸時代最大の宿場である熱田宮宿を拠点に熱田大山の復活や前後する桑名宿、有松・鳴海宿と連携し「街道と海道」を結ぶ活動を展開します。



NHK街道てくてく旅で岩本さんと桑名へ

熱田宮宿と桑名宿との「七里の渡し」間での航海活動で交流し「七里の渡し」間の船旅を再興させます。次いで熱田宮宿と有松・鳴海宿間の祭り文化を再興、そして熱田宮宿、桑名宿、鳴海宿との

「街道サミット」へと発展させることを主眼にしています。



昭和初期⁴⁾と平成の熱田大山

将来は、その先の宿とも連携し伊勢湾岸の水文化の再興や堀川の浄化等を考えています。

おわりに

ご紹介しましたように多くの団体のご尽力と多くの人の参加とご協力があって名古屋堀川の水文化の一端が再興されまちづくりに寄与できたと考えております。我々の活動は地域、行政等との連携やネットワークがなくては有効な活動になりません。今後も連携を強化し活動して行きたいと考えております。万葉集や柳田國男の「海上の道」にも出てくる「あゆち潟」は、めでたき物（豊かな幸）をもたらす風が吹いていたという言い伝えからの名称ともいわれており、今後も豊かな水文化を伝えて参りたいと考えています。

参考文献

- 1) 「名古屋図」、名古屋市蓬左文庫所蔵、享保18年頃（1733）
- 2) 「名古屋叢書三編 第六巻 尾張年中行事絵抄 中」編集名古屋市蓬左文庫、(財)東洋文庫所蔵
- 3) 名古屋市HP公表資料（<http://mobile.city.nagoya.jp/stat/>）
- 4) 「郷土の山車写真集」、山田鉦七、1971.4

理事長 川口正秀 副理事長 中島佳郎